

津波被害甚大だった荒浜地区へ、鎮魂に訪れて

大震災から2年経ちお彼岸でもあることから、彼岸の入りの日には仙台の中心街から車で僅か30分弱の津波被害甚大だった荒浜地区へ鎮魂に訪れた。

震災後何度か訪れようと地域の入り口まで行ったことがあるが、関係車両以外進入禁止の立て看板あり引き返したが、「東日本大震災慰霊之塔」や「荒浜慈聖観音」が建立されたこともあってか今回は何とか地域に入れた。

実は2年前のあの日の午前中、この地域の園芸センターを訪ねていただけに、「もし午後だったら…」と思うと、この荒廃とした風景を目にすると言葉を失う。

観音像の側には、この荒浜地区と隣接する蒲生地区で犠牲になられた190余名のお名前と年齢が刻まれた慰霊碑もあった。

地域の防砂林、防風林だった多くの松は倒木したままだった。

この地域の県道から海岸部は、津波被害危険区域に指定され、住んでいた方々はもうこの地域には戻れないその気持ちを思うと……(;_;)

更地になった所々の住宅跡には、復興を願ってか黄色いハンカチがたなびき、その袂には住んでいた方々の復興への願いと再起の決意が書かれた看板も。

荒浜小学校にあの日地域のみなさんは避難して来たようだが、この校舎の2Fまで津波が来て、みなさんは3階、4階、屋上に避難したとか。

津波被害危険区域内のこの小学校校舎は、地域で働く人の津波避難場所として保存が検討されているよう。

震災を忘れずに次世代に語り継ぐには、膨大な映像記録で十分だ！とか、海岸線を公園化する計画や被害にあった建物や船をメモリアルとして保存の検討等を耳にする。

しかし、被災地の惨状空間に身を置いて等身大での体感覚こそが何よりの有効な要因になると思うだけに、津波災害危険区域に指定される地域全体をそのまま残すことは無理なことなのだろうか？

このことこそ、大いに議論して欲しいと思う。